

音を聴き合うかわり合いづくり

「つなげる」ことでせまる音楽の魅力 ～思いや意図をもって表現できる子どもに～

居澤 結美

本年度、音楽科研究テーマ＜「つなげる」ことでせまる音楽の魅力～思いや意図をもって表現できる子どもに～＞に基づき、個人テーマを「仲間（友だち）」を意識して「つなげる」こととして研究を進めてきた。音楽が子どもたち同士の関係性を「つなげる」ものとなればと考えたからである。ただ演奏したり、歌ったりして達成感や一体感を得るという考えだけではない。音の重なりや速度、リズムなど多くの音楽を形づくっている要素や技法などを獲得し、自分たちの音楽表現をより豊かにし、「自分たちはこんなこともできるんだ」という経験を積み重ねていきたいと考えている。

その学習の中で、「相互評価」を取り入れていく。「相互評価」ができる場を意識し、単元構成を考えることで、子どもたちが活動の中で自分の思いや意図を明確に相手に伝えることができるのではないかと考えた。個々にまたグループで「相互評価」を取り入れることで、それらを次の課題に活かし解決に向かえる場を作り出していけるのではないかと考えた。昨年度から「居場所ある学級風土」を意識し、聴き合える学級をめざすために“無音の状態”を大切にしながら取り組みを進めてきた。

キーワード：相互評価、可視化（表現）、つなげる、無音の環境

1. 研究目的

音楽科研究テーマ＜「つなげる」ことでせまる音楽の魅力～思いや意図をもって表現できる子どもに～＞として、様々なつなげる取り組みを行ってきた。

そのために、教科提案で示しているように、①教材②仲間③自分との3つの「つなげる」を意識して取り組んでいる。6年生は②仲間という「つながり」を強めるには難しくもあり、とても重要である学年と感じている。②がうまくいかないと①③のどちらも円滑に進まない。逆をいうと②がうまくいけば①③も深まるのではないかと考えた。そこで②を重点として研究を進めていきたいと考えた。

2. 研究方法

2. 1. 相手意識をもてる課題提示

自分やグループの表現がどのように相手に伝わっているのかを常に意識できるような課題を出すようにした。自分の思いや意図を明確にもち、表現できているようで相手には伝わっていないことがよくある。表現する側も聴く側も相手意識をもつことでお互いが理解し合えると考えた。

2. 2. 無音の環境を意識する

4月当初から以下のことを伝えた。

i) 音楽を聴くとき、グループの発言・演奏を聴くと

き友だち一人一人の発言・演奏を聴くときは静かに聴くだけでなく無音とする。

ii) 手に持っている楽器があれば、手から離す。

iii) 話を聴くときは静かにする。

iv) 音楽だけでなくすべての教科で行う。

誰かが話すとき・演奏するとき、今行っていることの手を止めて、自分の心と体を相手に向けて聴くことは、相手を大切にしているという気持ちの表れである。また話している側にとっても、聴き手がそのように気持ちを込めて聴いてくれているという安心感と自分は大切にされている存在なのだと感じられることで自尊心が高まる。そのような雰囲気の中で学習できる環境が大切だと考え、「居場所ある学級風土」づくりとして特に意識して進めた。

2. 3. 相互評価

聴き合う関係づくりができていると仮定すると、その関係性を生かして、お互いの音を聴き合い、どの点がよいのか、より豊かな表現ができるのかなどを伝え合うことができる。それは個々でも行うことができるし、グループ同士でもできる。さらに自分たちの音を聴き合う演奏ができれば、グループ内での相互評価も可能である。それには、演奏する技能も必要になってくるが、この相互評価を子どもたちが伝え合うことで「つなげる」を意識した関係性が築けると考えている。

2. 4. グループ活動

それぞれの感じたこと・気付いたことを出し合い、

工夫をすることで自分とは異なる意見や考え方と出会い、自分の中に取り入れていくことで自己を更新していく。また考えを伝え、話し合うことでかかわりを深めていくこともできる。グループでのかかわり合いを大切にすることで、友だちへの気付きが生まれてくる。

2. 5. 他教科・領域との関連を図る

音楽は、週1. 5時間である。短い時間の中でより充実した内容を行うためには、国語、図工、体育など音楽はさまざま教科・領域と関連付けて学習を進めるという視点が必要だと考えた。また学びの足跡を残す場合、音楽は音楽室という毎日立ち入らない環境で授業をすることになる。そのような中で自分の教室に音楽に関する掲示物があれば、毎日無意識に音楽にかかわることができる。そして音楽は苦手だけれど、図工や国語など他教科は得意だと感じる子もいる。音楽を少し遠く感じている子どもたちが少しでも近くに感じられるならと願う。

国語では、自分の書いた詩に旋律をのせたりすることもできるし、歌詞を詩として読み、その意味や意図を考えたりすることもできる。図工では、音楽を聴いてもしくは歌詞の世界観を絵や造形物として表現することができる。体育では、表現運動として音楽を用いたり、リズム運動として活用したりもできる。音楽がそれぞれの教科を深める手立てとなり得るし、その逆も考えられる。

3. 題材（学習活動）の実際

3. 1. 教材について

「風を切って」（土肥 武作詞／橋本 祥路作曲・教育芸術社）は日本を代表する世界的な冒険家の植村直巳をイメージしたオリジナル曲である。前奏や間奏、コーダを除くと、主要部分はA (a4 + a'4) + B (b4 + b'4) の二部形式である。ただし前半Aは反復される。

前に突き進むようなAの部分と心の叫びを歌い上げるようなBの部分との対比に注目させ、子どもたちの思いや願いが込められた演奏になるようにと考えている。

3. 2. 他教科とのかかわり（国語）

下記の図1は他教科との関連を意識して、授業を進めていったときのものである。

この詩は、何も言わずみんなで読んだ後、感じること・分かること・イメージすることをどんどん書いていった。

土肥さんが植村さんをイメージしたということも伝えなかったし、植村さんという名も出さなかったのだが、「雪山に登っているよう」や「南極を旅している」、「犬ぞりをひいている」や「一人だけで荷物みたいなものをひいて歩いている感じ」などたくさんの意見が出てきたことに私自身が驚いてしまった。文章からのイメージの大きさを感じた。「生きているけど死んでいるみたい」とその旅の過酷さを表現豊かに表している子もたくさんいた。それほどこの旅が過酷で、ただただ前しか見えず、しかも歩いて行くしかない、というイメージがどんどん湧いていた。何人かは「こわい」という思いも芽生えていた。

また、「どうしてこんなことするんやろ」、「自分だったら絶対に行かない!」、という思いがわき上がってきた様子だったが、それに対して「絶対にこれ（旅のこと）楽しくないと思うんよ。つらいししんどいし過酷やし、それでも行ってるってことはなんか信念っていうか、目的があって行ってると思う。そうじゃないと行かないよ」という発言にみんなうなずいていた。

そして、最後は「氷河に消えた」という文に対して、「亡くなった感じがする」、「もう戻ってこない感じ」、「ずっとずっと続く感じ」と意見が出されていたことにも、子どもたちの感じ方の鋭さに驚いた。終わりに少し、植村さんの説明を行い、本授業を終えた。

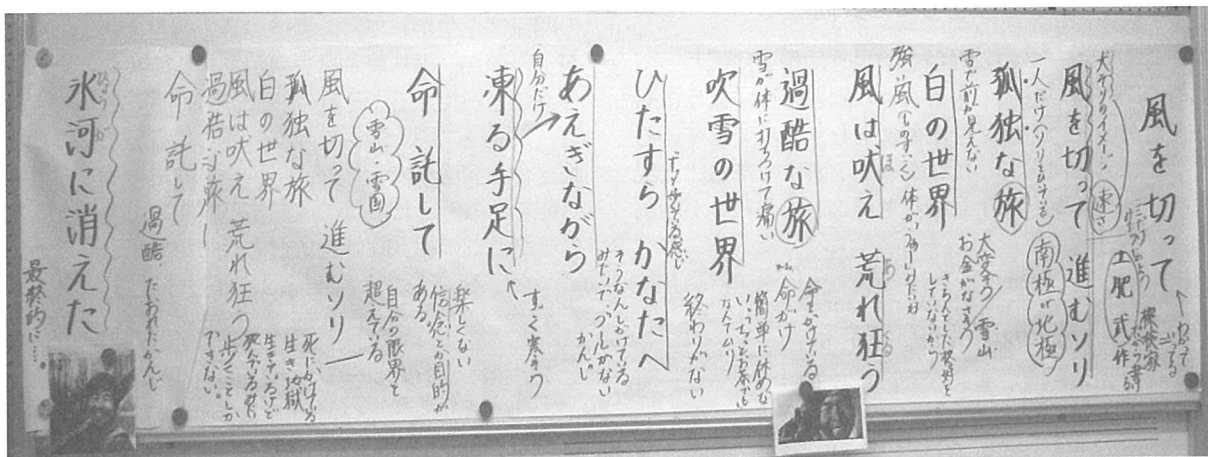


図1 風を切って（国語）

3. 3. 音楽での授業

国語の授業で行った詩を音楽室に張り出した。子どもたちからは「国語するの?」と声が挙がったが、すぐに「風を切って」を流すと「あっ!」とびっくりしていた。そしてこれからしていくことについて伝えた。

歌唱は、一度授業していたからか歌詞を多くの子がほぼ覚えており、すぐに歌い始めていた。「旋律が歌詞ととても合っている」と言っていたが、最後の終わり方だけは、イメージと異なったようだった。それは、植村直巳さんの最後について、この詩の学習をする前から知っていたり、本で読んでいたり、この学習後から読書をしていたりする子など、また国語の授業で知った子の多くが、「氷河に消えた」という終わり方は、「静か」というか、強く“消・え・た”って終わるんじゃないかと、静かに、消えていくっていうか、悲しいっていうか、まだ死んだって分かんない…」という意見が多く出た。しかし、それ以外のアイウエは「そんな感じがする」ととてもうれしそうに言っていた。

これから自分たちで曲想を生かして合奏することで、楽器を決め、人数の割り振りを真剣にしていた。

楽器を選ぶ時、どうしても自分のしたい楽器を選んでいた。ただ①～④の人数の分け方は音の大きさや重なりを意識していた。また以前「ラバースコンチェルト」で主旋律を生かす楽器選びのことを学習したので、リコーダーを選ぶ子が多かった。各グループに拡大した楽譜への記入を促したが、まだ演奏するところまでは至らなかった。個人用の楽譜も渡していたため、共有するための手立てとしては子どもたちに混乱を与えていた。初めは各パートに分かれて、演奏練習をした。どのようにおこなうのかを確認し、そのあと、各グループに分かれてまた演奏練習に取り組んだ。まだ、工夫までできない感じだったが、「最初かならず合わせよう」や、「③がイのところからあんまり大きかったらよくないと思う」など声を掛け合っていた。

けれど終わりのオがなかなか進まずにいた。歌詞の学習を国語で行ったと記したが、そのためなのか、終わりの演奏をかせようとするグループがあった。

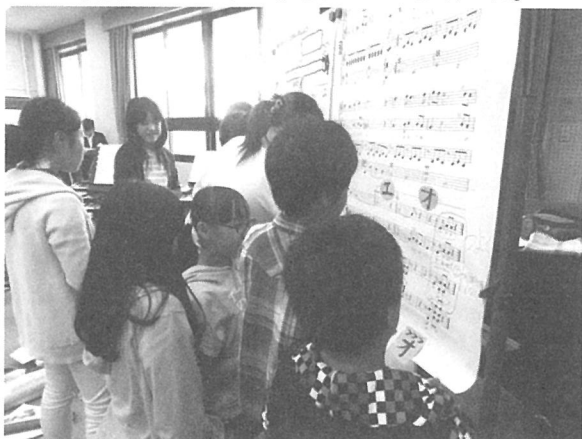


図2 風を切って (音楽)

あきら：こんな明るいつていうか、弾む感じでもないし、力強い感じでもないよな。

なつみ：わかる。消えていくんやろ。植村さん最後になつてくんやから、ちがうよね。もっと静かな感じっていうか。どうやっておわる。

はるみ：どうしよ。やっていっていいの考えよ。

作曲者・作詞者の思いや意図が示されている楽譜をその通りに演奏する中で、自分たちの「曲想を生かして演奏する」を考えてほしいと願っている。そこで、この上記のままではそれが難しいので、本来ならその時にしておくべきだったのだが、後日朝の会で少し問いかけてみることにした。

教師：みんなは「風を切って」の終わり方のイメージがちがうっていったでしょう。けれど、そう考えたときに、植村さんを思っ作詞した土肥さんも、作曲した橋本祥路さんも、どんな思いで、最後の最後にアクセントを付けたんやろね。

あきと：けど、力強い感じがするもん。

教師：たしかに。では、どうして力強くしたんでしょう。

はると：氷河に消えたんやろ。消えてるんやん。

はるな：自分から消えていったから、行くぞって感じかな。

みんな：ああ。けど…。

あきな：橋本さんは、まだ死んでなくて、自分から氷河に消えた!って感じかな。

ふゆみ：それなら、アクセントでまだ行くぞ!って感じかな。

この後、「氷河に消えた」を悪い方にとらえるのではなく、良い方に「まだまだ挑戦し続けている、植村さん!」という風にとらえ、さらに「生きている頃を思っているんだ」と考えていた。



図3 グループ学習

4. 授業の考察

4. 1. 「待つ」という姿勢から「じっくりと考える」を生み出す

多くの場面で、子どもたちの発言を待つということが大切だと感じた。音楽は限られた時数の中で、子どもたちの表現を求める。つい急かしたり、表現しきれないまま進めたりすることがある。だから「待つ」という姿勢が徹底できず、どうしても教師が話したり、すぐに手を挙げている子ばかりをあてていたりした。そうすることで子どもたちのじっくり考える時間を奪っていた。また教師が「待つ」ことができないので、子どもたち自身もそうであったように考える。教師自身も相手意識のある課題や課題に自信がある時（子どもたちから出た明確なもの）や、子どもたちへの課題提示が明確な時や、その課題を考えることで学習の見通しがもてるものであるときは、待つことができていた。このことから教師自身が、課題が不明確で見通しをはっきりとめていないときが原因だと感じた。下線部が出来ている時こそ、タイミングを逃さない子どもたちへの働きかけが見えてくるので、再度「子どもたちの願いと教師のねらい」を単元構成に入れようと考えた。

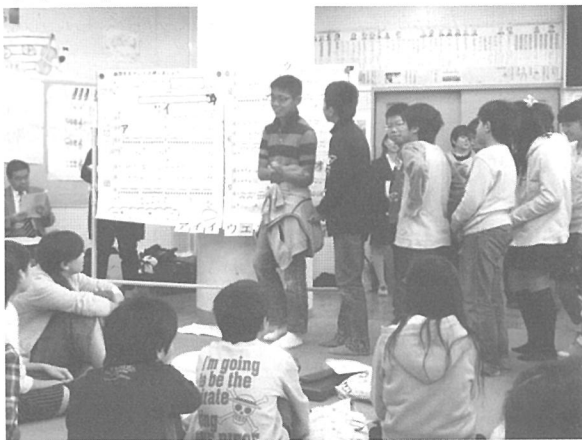


図4 じっくり考えることで見えてきたもの

4.2 キーワードを掘り下げることで教師のねらいにせまる

教師がねらっていたある言葉・キーワードが出ると、それを上げるけれど、掘り下げることなく進んでしまうことがあった。

教師：みんなが読んでみて
あつ：曲想を生かして合奏しよう
教師：曲想って何だった？
中略
ふう：強弱。
教師：なるほど。
れい：抑揚。

上記のことは、この単元では毎時していることなので、教師は、このキーワードをわかったものとして、進めていた。けれど、「ここで考える強弱は？抑揚は？」と掘り下げていかないと、みんなも分かった気になってしまう。またそこに生まれる思いや願いもあるので、言葉を丁寧にあつかい教師が立ち止まる機会をつくる

ことが大切だと考える。また教師だけでなく、子どもたち自身がそれに立ち止まれる学級風土づくりを普段から構築していくことが必要だと感じた。

5. 課題と展望

5.1. 他教科との関連

国語と音楽そして、図工でこの題材のイメージを絵に描いて表現するなど、さまざまに関連させて行なった。

そこで、子どもたちはより深く教材にせまれたのではないかと考える。ただし、国語での読み取りを音楽の表現にどのように生かしていくかは今後の課題である。

5.2. 総合学習を考える

上記の成果と課題を踏まえて、来年度は音楽を総合的な学習の時間と合わせて、よりダイナミックにより表現のひろがりが見られるように単元を構成していきたいと考える。

それは、時数の少なさという理由もあるが、国語・図工、算数など他教科どうしが関連し合える可能性が音楽にはあるからである。またグループ学習、相互評価も取り入れて、今後取り組んでいきたい。

参考文献

- ・文部科学省(2011)「小学校新学習指導要領解説」音楽科
- ・佐伯 胖(2010)「「学び」を問いつづけて～授業改革の原点～」小学館
- ・金本 正武 坪能由紀子 [編著](2009) 東洋館出版社
「小学校新学習指導要領 ポイントと授業づくり音楽」
- ・文部科学省 国立教育政策研究所 (2011)
「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための資料【小学校 音楽】」 教育出版
- ・公益財団法人 音楽鑑賞振興財団 [編集] (2011)
「体験してみよう！実践してみよう！これからの鑑賞の授業」同財団
- ・鹿毛雅治・奈須正裕[編集] (2010)
「学ぶこと教えること」～学校教育の心理学～ 金子書房